2014 年　県民せいきょう被災地支援ボランティアバス活動報告

◆日　　時：2014 年６月２０日（金）夜～２２日（日）夜

◆活動場所：岩手県陸前高田市内

◆参 加 者：２８名（一般 21 名、生協職員７名。内東日本被災地へのボランティア初参加は 13 名。）

・今回の参加職員：７名＋子ども１名

茶谷さん（嶺北センター）、金森さん・竹内さん（第１地区本部）、漆崎さん（丹南支所）、藤嶋さん（店舗運営部）＋お子さん、中島さん・樫尾（地域ＮＷ支援）

◆活動概要

・21 日：NPO 法人「再生の里ヤルキタウン」花画廊での除草作業・球根堀り　＊いわて生協と協同

NPO 法人「再生の里ヤルキタウン」は、「憩える　集える　元気を発信する　みんなのコミュニティ広場」をめざして、地元の有志の方々が創設されました。お花畑や野菜畑、オープン広場、カフェや店舗もあり、今は子ども達が集って学習できるスペースを準備中とのことです。

・22 日：オープンガーデン「花っこ畑」での除草作業

「花っこ畑」は、津波ですべて流された土地に、再び花を咲かせようと個人の方が活動されているところで、被災された方々がお花や土いじりで気を紛らわしたり、お話できるところになっています。「人間だから、（震災のことを）忘れちゃうのはしようがない。でも、ボランティアに来られることで、また思い出して、周りの人たちに伝えてください」と代表の吉田さんが話されました。

・復興状況

陸前高田市の海岸近くは更地で、至るところに土を盛ってかさ上げする造成工事が行われていました。遠くの山から土を運搬する巨大なベルトコンベヤーが頭上高く、あちらこちらに繋がっていて、多くのトラックが行き来していました。歩いている地元の方は全くいませんでした。

「被災された方々の生活再建はまだまだなんです。」と、NPO 法人「再生の里ヤルキタウン」の理事長　熊谷さんは何度も口にされていました。

いわて生協ボランティアと協同で除草作業
（再生の里ヤルキタウン）

側溝の除草作業（花っこ畑）

「再生の里ヤルキタウン」熊谷理事長からお話を伺う。

休憩時に震災時の写真を拝見（花っこ畑）

◆参加職員からの感想

・ボランティア受け入れの方が言われていました。「震災のことを忘れないでくださいとは言いません。時々でいいので思い出してください。一人一人が友達や家族に伝えてください」「仮設の人の中には、もうこのままでもいいと諦めてしまっている人もいる。公営住宅が立ち始めたけど、どれだけの人がここに戻ってくるのか」。今、私に出来ることはなにか、考えさせられた３日間でした。草取りしか出来なかったけど、実際にその場に立ち、現地の人の生の声を聞けたことは貴重な体験でした。地元の方に寄り添うことが出来て良かったです。

・復旧がまだまだ進んでいないことを見てきました。今後の復旧計画では地面のかさ上げに加え、現在の倍以上の高さの防潮堤が計画されていて、この大きすぎる計画が今後の生活を想像することを難しくしており、前向きになれない住民を増やしているのではないかと思いました。
また、住民の方が歩いているところを見ることはほとんどなく、活気が感じられませんでした。このような状態だからこそ、住民の皆さんが気軽に集まり、談話するスペースが必要だと感じました。私は、住民の皆さんがこのコミュニティスペースに集まり、話をすることで少しでも笑顔になることをイメージしながら、作業に参加させて頂きました。私の好きな復興応援ソングの歌詞「誰かを通して、何かを通して、想いはつながってゆくのでしょう」。そんな「誰か」であれる職員、「何か」であれる生協でありたいと強く思いました。

・今回のボランティアに参加し、「行って良かった。」と思いました。現地の姿を実際に自分の目で確認することが出来たからです。今までは想像するしかなかったのですが、それらをはるかに超えたものでした。特に心に残っていることは、決壊した防波堤から見る山と町の様子で、３年経った今もなおガランと草だけが生えているその町を見ました。郵便局や銀行、理容院も仮設のプレハブで営業をしていました。「生活再建が遅れている」とおっしゃっていた受け入れ先の方の言葉の通り、あのガランとした町を見る限り「ここへ戻ってくる人は果たしているのだろうか」と感じました。次の機会があれば「また参加したい！」と思っています。特に、私のようにまだ１度も参加したことない若手職員に自分の目で実際見て欲しいと思います。「生協職員」としての信念が目覚めたように思います。

・陸前高田に着き、見える風景に言葉を失くしました。見渡す限りの更地と行き交う車はほとんどが作業トラックというまだまだ復興には程遠い現状でした。今回のボランティアは除草作業中心でしたが、仕事の大小は関係なく現地に足を運んで望まれていることをやることが、ボランティアを継続するための大切な使命だと改めて感じました。
被災地の方達は辛い思い出はなるべく口にしたくないと思うけれど、被災地の方達の「忘れられてしまうことが一番辛く悲しい」という思いが、何度も何度も話をしていただける理由だと思います。だからこそそれを聞いた私達はそれを伝えていかなければならないのではないでしょうか。
「伝えることの大切さ」を私は一番に、これからも自分にできることを継続したいと思います。

・被災地はまだまだまだ復興していないと感じました。また、被災地に行って活動することだけがボランティアではなく、被災した人の話を聞いたり、現状を伝えることで風化させない、福井にいても出来ること（①被災地のことを思い出す②被災地のことを伝える）はあるということです。被災地の方は、自分が被災して何もかもを失ったのに、1 日でも早く復興させようと毎日頑張っています。今回参加させていただいて、事業所内で職員に伝えることが大事だと感じました。また、被災地に行っていない職員は是非参加してほしいと思います。参加できなくても被災地のことを忘れず思い出してほしいです。

・３年経てど復興はまだまだ。現地の人に殆んど会うことなく、仮設住宅などに落ち着いてしまったのか？言い換えれば、閉じこもり生活になっているのかも知れません。集える場所も公園も畑も無く、空き地は雑草が植えてきています。街、住宅、会社、工場、官公庁等などの再建も数少なく無く、ただただ、だだっ広い更地が、もの寂しい限りです。他の職員には、とにかく一度参加して　自分の目で・肌で・感じて欲しい。支援は　いつでも、何処でも、各地のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｾﾝﾀｰへ問い合わせして実行できます。

・陸前高田市の海岸近くは見渡す限りの更地で言葉も出ませんでした。「被災された方々の生活再建はまだまだなんです。」と、受け入れ先の方は何度も口にされていましたが、実感しました。今回参加した私達ボランティアは、活動が終わって役割終了ではなく、「被災地のことを思い出して、生涯伝える」という重いミッションを背負って福井に帰るんだと、感じました。